Japan Society of Obstetrics and Gynecology

P2-23-4 早発閉経へのホルモン療法が動脈硬化危険因子に与える影響についての検討

聖マリアンナ医大
五十嵐豪，戸澤晃子，谷内麻子，石塚文平

【目的】早発閉経（premature ovarian failure : POF）は40歳未満の高ゴナドトロピン性無月経で，エストロゲンの作用低下により動脈硬化が促進されると考えられている．そのためPOF患者に対してホルモン補充療法（Hormone Replacement Therapy : HRT）が行われることが多い．エストロゲンはホットフラッシュなどの血管運動神経症状の改善に有用とされ，さらには冠動脈疾患のリスク軽減の可能性も示唆されている．POF患者に対するHRTが動脈硬化の予防となるかについて検討した．【方法】脂質低下薬を内服していない，同意を得たPOF患者23人（POF群）と自然閉経後HRT施行中の患者22人（HRT（+）群），自然閉経後HRT施行なしの患者39人（HRT（−）群）を対象に採血検査（LDL-C，HDL-C）及び頸動脈超音波検査にてプラークの測定を行った．また，リスク指標とされるLDL-C/HDL-C比（LH比）やホモシステインとの関係について検討した．【成績】POF群，HRT（+）群，HRT（−）群の年齢中央値はそれぞれ47，50，52歳．POF診断年齢の中央値は36歳で，HRT（+）群のHRT平均開始年齢は48.1±5.7歳．HRT継続年数中央値はそれぞれ8，3年．頸動脈プラークの保有率は21.7%，31.8%，46.1%．LH比の中央値は1.57，1.53，2.03．それぞれに有意差は認めない一方で，全対象患者のうちLH比が2.5以上であった患者は有意にプラーク保有率が高かった．ホモシステイン平均値は6.8±1.3, 6.5±2.1, 7.5±2.5 nmol/mlで有意差はなかった．【結論】HRT（−）群と比較して，POF群へのHRTは，HRT（+）群と同様にプラーク保有率，LDL-C/HDL-C比が低い傾向にあり，動脈硬化を予防する可能性が示唆された．

P2-23-5 136名に対するエクオール含有大豆胚芽発酵食品の使用感調査

矢追医院[1]，獨協医大越谷病院[2]
矢追正幸[1]，林　雅敏[2]

【目的】大豆イソフラボンの活性代謝物「エクオール」を含有する大豆胚芽発酵食品の更年期症状に対する改善効果および使用感について調査した．【方法】2011年1月から7月の間，当院を受診したインフォームド・コンセントを得た患者136名（22-80歳）を対象にエクオール含有発酵大豆胚芽食品（エクオールとして1日10mg）を4〜12週間継続摂取させ，摂取開始前，および1ヵ月毎あるいは摂取中止時にアンケート調査を実施した．アンケートの内容は，年齢，身体計測，閉経の有無及び閉経後年数，出産経験，職業，睡眠時間，既往歴，服薬状況と，更年期22症状（日本産婦人科学会の更年期症状評価表）の程度を4段階（無=0，弱=1，中=2，強=3）で記載してもらい，期間中の症状を4週間毎に調査した．統計解析は，摂取開始前からの症状の変化を乱塊法モデルのDunnett検定を用いた．【成績】更年期疾患で来院した患者は56名であり，そのうちHRTあるいは漢方薬等の治療を受けている患者は17名であった．全患者136名中，1ヶ月中止者が3名，2ヶ月中止者が4名観察されたが有害事象によるものはなかった．3ヶ月継続完了者で症状改善を実感した人は59%おり，継続摂取を希望する者は71.1%いた．更年期疾患患者における有意な症状改善には，疲労感，眼精疲労，動機，頭痛，肩こり，腰痛，性交痛，冷えおよび手足のしびれに認めた．また，更年期症状治療中の患者では，疲労感，動機，肩こりで有意な症状改善を認めた．【結論】エクオール含有発酵大豆胚芽食品は，更年期疾患で来院した患者に対する有効性が観察され，HRTあるいは漢方薬等の治療を受けている患者においても身体的症状の改善に有効である事が示唆された．

P2-23-6 卵巣摘出マウスを用いた補中益気湯の更年期女性に対する有効性の検討

藤田保健衛生大
坂部慶子，西尾永司，河合智之，伊藤真友子，伊東雅子，安江　朗，塚田和彦，小宮山慎一，関谷隆夫，長谷川清志，
廣田　穣，宇田川康博

【目的】更年期における卵巣機能の衰退は，エストロゲンの減少により視床下部，下垂体機能に変調を来し，精神神経症状を引き起こす．漢方薬の補中益気湯は，気力，体力が衰え，倦怠感が強い人に頻用され，更年期外来で処方するケースも多い．今回補中益気湯の卵巣摘出マウスへの影響を検討した．【方法】メスの卵巣摘出マウス（n=12）を用いた．卵巣摘出マウスを通常の餌を与えたcontrol群（n=6）と補中益気湯含有餌を与えた補中益気湯群（n=6）に分け比較した．（実験1）control群と補中益気湯群の週齢22週から48週での体重と食餌摂取量を比較検討した．（実験2）底面を3×3に区切ったオープンフィールドを用意しビデオに15分間のマウスの行動を記録した後，移動距離，休止時間を行動解析ソフトウエア用い解析した．（実験3）HPLC法を用いcontrol群と補中益気湯群の脳内セロトニン量を定量した．【成績】（実験1）体重はcontrol群と補中益気湯群で差を認めなかった．食餌摂取量は補中益気湯群ではcontrol群に対し増加した．（実験2）移動距離はcontrol群：2179.403±125.8m，補中益気湯群：3453.446±592.5m（P=0.03628）で補中益気湯群で延長した．休止時間はcontrol群：216.8±12.6分，補中益気湯群：160.9±15.3分（P=0.07）であり，2群間で差を認めなかった．（実験3）脳内セロトニン量はcontrol群：118.3±23.5ng/ml，補中益気湯群：108.7±13.2ng/ml（P=0.793）であり，2群間で差を認めなかった．【結論】補中益気湯食餌摂取量を増加させる一方で体重は増加させなかったのは補中益気湯の活動亢進促進効果が関与する可能性がある．補中益気湯は食欲が減退し，活動が低下した更年期女性に適応があると思われた．

NII-Electronic Library Service